

山村正夫

魔女の呪い  
島殺人



C★NOVELS

**C★NOVELS** ©1997 Masao YAMAMURA

---

まじよ のろ じまさつじん  
**魔女の呪い島殺人**

1997年 3 月10日 初版印刷

1997年 3 月22日 初版発行

著 者 やま ひら まさ お 山村 正夫

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三 晃 印 刷

カバ ー 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部03(3563)1431

編集部03(3563)3664

振替 00120-4-34

Printed in Japan

ISBN4-12-500460-9 C0293

定価はカバーに表示してあります。  
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り  
下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

# 魔女の呪い島殺人

山村正夫

C★NOVELS

中央公論社

挿 画 小 泉 孝 司

DTP制作 オフィス・トイ

目次

|       |               |     |
|-------|---------------|-----|
| プロローグ | 魔女焚殺          | 7   |
| 第一章   | 昭和四十四年蠍座生まれの女 | 22  |
| 第二章   | 妖婆島           | 37  |
| 第三章   | マリアの洞窟        | 59  |
| 第四章   | 幽霊来訪者         | 75  |
| 第五章   | 絞架上の殺人死体      | 88  |
| 第六章   | チロル・ハットの野宿者   | 108 |
| 第七章   | 疑惑の密室         | 137 |
| 第八章   | トランスポーション殺人   | 156 |
| 第九章   | 空白の一日         | 176 |
| 第十章   | ダブル殺人計画       | 192 |
| エピローグ | 凶運の星          | 225 |



魔女の呪い島殺人



## プロローグ 魔女焚殺

## 1

その日の夕映えの景色は、いつにも増して殊のほか美しかった。

真紅に燃えた太陽が、西方の水平線上の彼方に沈むと、しばらくの間はあたりの空一面が、ほかに染めの茜色に変わる。やがてその残照が徐々に薄らいでいくとともに、薄闇が海面や陸地を仄暗く霧状に包みはじめる。夕焼け空は翌日の晴天を約束する証しでもあった。

夕風に乗って、お告げの鐘が鳴り始めた。三年前、島内唯一の高所である丘の頂きに、すべてが

切支丹の信徒で成り立っている老若男女が総出で建立した、俗に南蛮寺と呼ばれる天主堂の鐘楼からであった。そこに住むイスパニア人の伴天連（宣教師）パードレ・ロドリゲスが、自ら綱を引いて鐘を鳴らしているのだ。

その鐘の音が聞こえてくると、ふだんの日なら、島民たちは畑地や浜辺の網干場、あるいは住まいの外に出て、おのおの胸に十字を切り、首からさげたロザリオやメダイに手で触れ、敬虔な祈りを捧げるのが慣わしになっていた。

「天に在します我らが天主よ。聖名を崇めさせ給え」

「サンタマリア……」

三々五々、夕べのミサに赴くため、丘の上の天主堂に向かう。

詣ろうや詣ろうや樂園の国に詣ろうや……

口々に天主を称える賛美歌を唱えながら。

だが、今宵だけは違っていた。

日頃、島民たちはパードレから、人を愛し人を慈しむことこそ神の教えだと説教を受けていた。それを信仰の教義として固く守り続けてきたのだが、その日に限り彼らの純朴な心に、殺伐な狂気が宿っていた。見慣れた日没の平和な光景が血の色に映り、いつもなら耳に快く響くお告げの鐘の音が、彼らの凶暴心を拍車のごとく駆りたてる音として聞こえたのである。

「悪魔の手先、魔女の母娘を殺せ！ 天主に仇なす異端者に罰を与えよ！」

四方八方から集まった男女の島民たちは、島長の徳右衛門を先頭に、熱狂的な叫び声を発しながら、

ら、そこかしこに寒椿の咲き乱れる、丘の斜面の坂道を駆け登った。男衆は手に手に松明をかざし、女衆が後につづいた。島民たちの数は百名余りに上った。

丘の上の天主堂は、瓦屋根を葺いた、一見したところは仏教の寺の持仏堂のようだった。ただ屋根の上に十字架が立ち、それよりひとときわ高い鐘楼が隣接しているのが一風変わっていた。

その天主堂の前に、この島に住む唯一の伴天連、パードレ・ロドリゲスが彫像のように凝然とたたずんでいた。頭頂だけを丸く剃り、紅毛で囲んだ伴天連独特の髪型をしている。服装は黒衣に黒マント、腰は十字架をさげた紐で結えている。

年の頃は三十七、八だろうか。さながら鶴のような瘦軀で、長年にわたる禁欲生活が彼の性格を狷介にしたのに違いない。神経質で猜疑心の強そうな、鋭い光を目に宿していた。黒ずくめの僧服なので、烏を想像させなくもなかった。

この年——一五七六年（天正四年）。

近江の琵琶湖畔に、壮麗な安土城を築いた織田信長は、全国統一を目前に控えた覇者としての地位を築き、海外貿易の富も一手に収めていた。そして、それらの南蛮船とともに渡来したポルトガルの伴天連たちの布教を認め、城下にセミナリオ（切支丹布教の学院）の建設を許すなど、手厚い保護政策を取ってきた。

そのため各地の武将たちの間にも、信者が続々と増え、大友宗麟（オウリキ、靈名フランシスコ）をはじめ、小西行長（同アウグスチヌス）、高山右近（ウツノ、同ジユスト）、蒲生氏郷（カモウジキョウ、同レオン）らが、次々に仏教から耶蘇教に改宗している。彼らはいずれも切支丹大名と呼ばれた。したがって、信長の在世中が、切支丹の信徒にとっては、もっとも平和で自由な信仰に生きることができた、よき時代だったといえるだろう。

だが、そうした最中に九州の五島列島に属する名もなき一小島で、そこに住む切支丹信徒を震駭させる、途方もない一大事件が起こったのである。その年、天正四年の春、難破してこの島に漂着したポルトガル船に、イスパニアからはるばると乗船してきた、紅毛人の母娘が乗り込んでいた。母親のイザベラは五十一歳。娘のミリンダは二十六歳だった。二人とも紅毛人独特の蚕のような色白の肌に青い目とブロンドの髪をしていたが、娘のミリンダは殊のほか美しかった。肩まで垂れた巻毛の髪と、潤みを帯びたエキゾチックに澄んだ瞳、島の娘とは異なる整った高い鼻梁などが、魅力的な顔立ちを作っていた。

難破したポルトガル船は、破損した箇所修理がすむと故国に引きあげたが、母娘だけは何としても島に残っていたいと切望し、村の長老たちの合議でそれが認められた。ただミリンダの明るく初々しい可憐さにひきかえ、母親のイザベラの絶

えず何かに脅おびえているようなオドオドした暗い眼差しが、対照的といえなくはなかった。

善良な島民たちは、最初、この異国の母娘を温かく迎えた。浜辺の網置場だった小屋を空けて住まわせ、水や食物などの供給の世話も親切に怠らなかつた。

それが、その後一年余り経過して晩秋を迎えた頃、島民たちの態度がにわかに豹変したのである。そのきっかけはパードレ・ロドリゲスが、天主堂に徳右衛門をはじめ島の主おもだった長老たちを集めて打ち明けた、イザベラ母娘の驚くべき秘密にあった。徳右衛門たちが顔を揃えた祈禱所の正面には、聖壇が築かれている。その壁には、聖母マリアの画布が懸けられ、聖壇の上には左右の燭台の間に、高さ一尺（約三十三センチ）ほどのキリストの磔刑像たくけいざうが安置されていた。

その聖壇の前の椅子に腰をおろしたパードレ・ロドリゲスは、板敷の間に\*きちんと正座をしてい

る老人たち向かい、仰ぎやうぎやう々しい身ぶりで胸に十字を切ると、

「実ハ皆サン。マニラニアル、ドミニコ会ノ東洋教区長カラ、タイヘン重大ナ手紙、受け取りマシタ」

とおもむろに口を開き、たどたどしい日本語で語りだした。

「ソレデ、島ノ長老ノ皆サン方ニ、ゴ相談シタイト思イ、コウシテオ集マリ頂キマシタノデス」

「何があつたとです？ その手紙には、いったいどげんこつが書かれていたとですか？」

村の長老たちの中でも一番年長の今年七十歳になる徳右衛門が、持病の喘息ぜんそく病みの咳せきに何度もむせながら、一同を代表して聞いた。

側にいた女房のトメが、あわてて彼の骨ばった背中をさすった。

「コノ島ニ住ミツイタ、例ノイザベラトミリンダ母娘ガ、悪魔ニ魂ヲ売ッタ、魔女デアルコトヲ、

報セテキタノデスヨ」

「何てっ！ 悪魔に魂を売った魔女ですと？ パードレ様……」

「ハイ。教区長カラハ、コウ言ッテキマシタ」

ロドリゲスが明かした手紙の内容は、次の通りだった。

イザベラとミリンダの母娘は、もともとはイスパニアのマドリッドで暮らしていたという。それが近隣者から母娘に魔女の疑いがあるという密告が寄せられたことから、異端審問会が、二人を捕える手はずを整えていた。だが、その難を事前に察知した母娘は、知り合いのポルトガル船の船長に大金を支払ってたのみ込み、ひそかに乗船してイスパニアから脱出した。

その船はジパング向けの貿易船だったが、平戸に入港する予定だったところ、嵐に遭遇してこの島に漂着したという次第だったのである。

「そういえば、荒くれの男ん船員たちん間に、か

弱か女子おなごの二人だけ乗っちよったけんが、怪訝けげんの思いはしちよったんですがのう。事情は聞き出しようても、何せわしらには言葉が通じんけん、今日までなおざりになつとつたつですたい」

「ワタシニハ、イスパニア語ワカリマス。デスカラ、ムロン尋ネテミマシタヨ」

「それで、パードレ様には何と？」

「タダ、ジパングへ行ッテミタカッタ。ソウ言ウバカリデ、満足ナ答エ、得ラレマセンデシタ。ケレドソノトキノ母親ノ顔色、ヒドクオビエテ、タダゴトジャナカッタデス。コレハ何カワケガアルソノ疑イ、ワタシモズツト持チツツケテイマシタネ」

「そげん、こつでしたか」

「ナニハトモアレ、アノ二人ガデウスノ敵、悪魔ノ手先ト知ツタ以上、コノママ見過ゴシニスルコト、デキマセン。ヨーロッパノドノ国デモ、イマ魔女狩リ盛ン。異端審問会デ魔女ノ判決ガ下レバ、

タダチニ縛リ首カ火アブリニシテ、地獄へ落トシマス。マドリードノ異端審問会カラハ、世界各地ノヤソ会派ニ通達ガ出サレ、マニラノドミニコ会本部ニモ、ソレガ届イタソウデス。ドミニコ会カラハ、二人ヲ見ツケ次第、処刑スルヨウ命ジテキマシタ。ワタシ、ソノ指示ニ従ワナケレバナリマセン」

パードレ・ロドリゲスの口許には、伴天連とは思えぬ残忍な笑いが浮かんでいた。

## 2

「いやあ、たまげたとよ。あん母娘がそげんおぞまし<sup>すじょう</sup>か素姓の持主とはねえ。朝夕のミサにも欠かさず参加しちよったけん、わしらと同じ熱心な切支丹の信徒だとばかり信じちよったに……」

徳右衛門の口から深々とため息が洩れた。

それまでロドリゲスの話に、固唾<sup>かんとす</sup>を呑んで聞き

入っていたほかの老人たちの間に、いつせいにぎわめき声<sup>こゑ</sup>が起こった。

「まあまあ、皆の衆、静かに……」

徳右衛門は一同を手で制すると、再びロドリゲスの方に向き直った。

「ばってん。パードレ様、一つお伺いしたかことのありますたい」

「何デシヨウ？」

「魔女とお聞きしただけで、どげん妖怪じみた魔性の女か、おおよその見当はつきますばってん。実際にはデウスの教えに背く<sup>そむ</sup>、どげん邪悪なことは仕出かすのですか？」

徳右衛門が恐る恐る言ったのも、無理はなかった。

ヨーロッパにおいては、十五世紀から十七世紀にかけて、ドイツ、フランス、スペイン、イギリスなどで、一大魔女旋風<sup>まじゅうせんぷう</sup>が吹き荒れていたが、パードレたちの布教により、耶蘇教の教えが緒<sup>じよ</sup>につ

いたばかりの日本では、魔女についての知識はまったく皆無だったからである。

「マア、イッテミレバ魔法使イト申シマスカ。ソノ呪法デ農作物ヲ枯ラシ、悪疫ヲ蔓延サセ、ソノホカ毒薬ヲ作ツテサマザマナ害毒ヲ周囲ノ人々ニ流ス。悪ノ象徴トイウベキ恐ロシイ女デス」

「ほう、そげん忌<sup>いま</sup>わしか悪事を……」

「ソレバカリジャナイノデス。月ニ一度、帚<sup>ほうき</sup>ヤ杖ニ特殊ナ軟膏ヲ塗ツテ、ソレニマタガリ、煙突カラ抜ケ出シテ、悪魔ト魔女ノ集会デアル、サバトニ出席スルトイワレテイマス。ソコデハ淫魔ト通ジテデキタ赤児ヲ、犠牲トシテ悪魔ニ捧ゲ、ソノ悪魔トモ交ワルホカ、父ト娘、兄ト妹ナドノ近親相姦モ平然ト行ワレテ、乱痴氣騒ギノ狂宴ヲ催ストイウコトナノデス」

パードレ・ロドリゲスは口にするのも汚<sup>けが</sup>らわしいと言わんばかりに、苦々しげに顔をしかめて言った。

「地獄の奪衣婆や山姥の話なら、わしらも知らんじやなかとですがのう。そげん凶<sup>まが</sup>々々しか妖術<sup>まがまが</sup>ば使う恐ろしか魔女の、伴天連さまのお国におるとは、初めて知りましたとよ。帚<sup>ほうき</sup>か杖にまたがって、空ば飛ぶがですと？ そりゃあ、まさしく妖怪変化<sup>へんげ</sup>にほかならんですたい」

徳右衛門が激しい衝動を受けた面持ちで、声を震わせてほかの老人たちを見回した。

「そういえば、今年の島の農作物や椿油の収穫は、害虫の被害に遭うて、ここ十数年来の不作じやつたし、おまけにこの夏は原因不明のはやり病いの食当たりで、十名も死者の出たんじやなかと。あれはもしかしたらその母娘の魔女が、井戸に毒ば入れたのかもしれないとね」

それで思い当たったと言わんばかりに、膝<sup>ひざ</sup>をたたいて相槌<sup>あいづち</sup>を打ったのは、網元の義平<sup>ぎへい</sup>だった。

彼の発言に、その場に居合わせた四、五人の老人たちが、いずれも共鳴した顔つきになった。

だが、その中で、最初から黙然と首を垂れて、腕組みをしていた漁師の頭の伝次郎一人だけが、

「待ちんしゃい！」

と手を挙げて横槍を入れた。

徳右衛門をはじめ彼らはいずれも、ロドリゲスから洗礼を受け霊名を授けられた、熱心な切支丹信徒ばかりだった。

「別にパードレ様に楯つくわけじゃなかとですけん。ばってん、害虫の被害による農作物や椿油の不作は、いくなればただの天災ですたい。それに、あの母娘が島の井戸に毒を入れたという証拠は、どこにあるのですか？ 第一、わしにはパードレ様の言われるような、難しかことは何もわからんですけん。異端審問会とやらの決定が、まだ下されちよらん、頭から魔女扱いするのは、ちと早まりすぎではおらんとじゃなからうか。それに、デウス様のお教えは、たとえどげん罪深き悪人であろうと、愛と慈悲の心で接するよう、おっ

しゃっておられたのとは違うとですかね」

伝次郎がそのように異を唱えたのは、内密の個人的な事情があつたせいだった。

島民の中でも、イザベラ母娘に一番温かい手を差しのべたのは伝次郎で、母娘の住まいに、網置場の小屋を提供したのも、彼だったのである。

それだけではない。一人息子の雄作とミリンダが、いつの間にか愛し合うようになり、三月前に彼女は女の赤児を出産していた。はじめは頑なにこの恋を認めなかった伝次郎も、若い二人のひたむきな恋と、ミリンダが妊つたことを知ると、彼らの仲を認めるようになった。ただ、とかく口さがない島民たちの手前、うわべは死産ということにしてあつたが、実際にはその赤児は生きていた。ミリンダがひそかに出産すると間もなく、母子を無理やり引き離し、伝次郎の知り合いの平戸の通辞を介して、たまたま子宝に恵まれずにいた、オランダ商館の夫婦がいると聞き、その養女として

貰い受けてもらったのだった。

むろん、そのことは島の長老たちには、誰一人として明かしてはいない。伝次郎とその家族の内輪だけの秘密にほかならなかった。

「わしの見る限り、イザベラは異国人には珍しか、心優しき女子<sup>おなご</sup>じゃし、ミリンダは椿の花のごとき愛らしき娘たい。そげん恐ろしか魔女とは、どげんしても信じられんとね」

伝次郎は吸っていた煙管<sup>キセル</sup>の灰を、音を立てて煙草盆に落とすと、なおも力説した。

だが、ほかの長老たちの反応は、すこぶる冷ややかだった。

「そりゃあ、お主がそう言いたかこともわからんではなかとよ。雄作とミリンダの恋仲は、島の誰一人として知らん者はおらんけんのう」

徳右衛門がすっかり苦<sup>にが</sup>りきった面持ちで、吐き捨てるような口調で言った。

「ばってん、パードレ様のあおっしやるからに

は、それなりの根拠があつてのことじゃなかとね。のうパードレ様……」

「モチロン、魔女ノ証拠、歴然トシテアリマシタ。コノ天主堂ノ雑役ヲシテイル、オタカサンニタノミ、アノ二人ガ海デ水浴ビシテイルトコロ、ノゾカセマシタ。魔女ハ肌ニ独特ノシルシアルトイワレテイマス。オタカサン、ソレヲマザマザト見タソウデス。天主堂ニ戻ッテ、クワシク報告シテクレマシタ」

ロドリゲスは青い目に陰<sup>かげ</sup>しい光を宿らせて言った。

「ほう、どげんしるしのあつたのですか？」

徳右衛門が身を乗り出して、熱っぽい声で聞いた。

「イザベラノ乳房ニハ、ヒキガエルノアザ、ミリンダノ腰ニハ、コウモリノアザガ、クツキリトツイテイタトノコトデス。ドチラモ魔女ニシカナイ、マギレモナイアカシ。伝次郎サンハ、マドリード